

のが最後に御會ひ申したのであつた。「卒業してからゆつくりやつて來給へ」といつて下つた御言葉はもう御聞き申す事が出來ないのである。集中藏められた先生の遺作を見て自分はそゞろ回舊の念に打たれたのである。關西を風靡せられた洒々なる筆はすぐ轉じて谷口蕪村を想ふのである。

而して先生の所謂琵琶のバチ然たる鼻が目の前に髣髴とするのである。

先生の家の客間にかけてあつた影の青い額から鼻へかけ明るく光つて居る先生の肖像畫（和田英作先生が巴里在留中の筆とかや）がチラチラするのである。

先生の遺作河畔。向岸の家及び左方の森等は先生の肉筆に接する様である。

滿谷先生の野邊。これも非常にすきてある。大阪で先生の肉筆を見たが其畫が顔の前へ出て來る様である。

森田先生の山頂の夏。之も見た時如何なる現象にや去年拜見した大下先生の赤城山の畫が頭に淨んだそれはこれと反對に山が暗くて水面が明るく反射して居たと思ふ。世間で八ヶ間しい石川先生の金魚の障子の

反射も拜見した。

これ偏へに此の一小冊子の御蔭である。其代り自分などに、がらにもない事をいはずるのもこの一小冊子の罪である。終。

▲研究所六月例會の寫眞、起立せる分、右の方長髯の老人は鈴木眞氏にして、當年七十二歳にして孜々として水彩畫を學べる稀代の翁なり。柱を隔て、起てるは松山忠三氏、盛んな體度で正面に向いてゐるのが水野以文氏、一つ隔て、一番奥に居る洋服姿は丸山講師、其隣の洋服は河合講師、少しく隔て、起てるは大下講師、稍低く髯ある人は望月講師、其隣りは相田寅彦氏、左の隅は佐藤量氏にして、相田氏佐藤氏はレンズの中心を外れて顔が横長くなりたり。坐せる人にて、右の極隅頭だけ見ゆるは高橋松治氏、其前に大きく寫れるは鈴木一治氏、老人の下で正面を向ひて白衣を着けしは夏目七策氏、其前の井の字ガスリの大形の着物の主は岡田武彦氏、其後ろの柱に頭をつけたるは赤城泰舒氏、中央に坐せる肩揚の人の後ろ、右の方へ顔の三分一を出せしは

大磯で海鳥を捕へし太田福造氏、同じく左の方に小さく半顔を示せるは鈴木錠吉氏にして、なほ左の方には讀者諸君御馴染の人も數人ありしがレンズに入らざりしは遺憾なりし。

△ △ △

畫囊やら傘杖やら三脚やら持つたり背負たりして田舎へゆくと、よく、犬に吠へられる、これも一の寫生難に數へることが出来る、六月の農業世界には吠へて噛みつく犬と噛みつかぬ犬との鑑別法が出てゐる『吠へる犬に出逢つて第一に見るべきは其尾であつて、如何に吠へても尾を揮つてゐるものは恐ろしく足らない、犬は噛みつく時には決して尾を振らない』と

日本水彩畫會新會友

東京府下豊多摩郡澁谷村上澁谷六十二

黑瀬盛久